

## 後期ライプニッツにおけるモナドの支配-従属関係について

三浦 隼暉

### 1. はじめに

本稿では、1700年代以降にライプニッツが提示した「支配的モナド (monas dominans)」と「従属的モナド (monas subordinata)」の間に存する支配という関係を検討し、この関係が成立可能であるために、有機的身体の経験的認識が先立って要請されねばならなかったことを明らかにする。

支配的モナドは、物体の実在性に関わる概念である。このことについて、本論に入る前に簡単に確認しておく必要があるだろう。『モナドロジー』に代表されるライプニッツの後期哲学は、しばしば観念論的な仕方と解釈されてきた<sup>1</sup>。すなわち、非延長的で単純なモナドのみが真に実在し、諸モナドの複合から構成される物体のうちには単なる現象的なものしか存在しないと解釈される。しかしながら、近年のアーサーの研究が指摘しているように、中期ライプニッツの物体の実在性に関する主張が保持されず、後期には単に現象的な物体のみしか残らないのであれば、モナドの存在論証の重要な部分が抜け落ちることになってしまう<sup>2</sup>。この物体の実在性に、本稿が主題として扱う支配的モナドは密接に関わっている。というのも、支配的モナドは、統一的物体である生物のような存在者を説明するための概念、つまり単なる複合的物体に一性を付与するために持ち出され概念だからである。「真にひとつの存在でないものは真にひとつの存在ではない」(GP II 97. 傍点はライプニッツ自身による強調)というライプニッツ自身が依拠する公理に従うならば、或る物体が単なる観念的な現象ではなく自体的実在的なものであることを主張するためには、物体に一性を付与する必要があり、そのような一性を与えるものとして、支配的モナドは彼の思索のうちに登場してくるのである。

とはいえ、支配的モナドによる物体への一性の付与は、物体を真の存在へともたすのではあるが、実際は観念論的解釈を強化する事柄として機能する。というのも、現象の背後におかれた支配的モナドがなければ物体の一性はあり得ず、支配的モナドがありさえすれば、物体に一性を付与することができるのだとすれば、そのような物体の一性、すなわち実在性は支配的モナドへと完全に還元可能

なものとなってしまふからである。

他方で、本稿は、支配的モナド理論のうちに物体の経験的实在論を読み取ろうと試みるものである。後に明らかになるように、支配的モナドが或る一定の他のモナドを従属させるという関係は、有機的体という物体を前提とすることで初めて可能となる。それゆえ、一見すると物体の一性を完全にモナドの側で説明しているように思われる支配的モナド理論のうちに、物体それ自体の实在性を前提するというライプニッツの实在論的立場が潜在しているのである。

有機的体という経験的な要素を必要とするということは、純粋な理論としてのモナドロジーにとって破綻点ということにもなりかねない。しかし、むしろモナド一元論的なモナドロジー観こそ転換されるべきなのではないか。経験的な要素がモナドロジーの理論のうちに入り込むということは、モナドロジーという体系が固定的なものではなく、変化と発展の可能性をもった理論であることを示唆している。实在論的解釈は、モナド一元論の理論的な経済性を犠牲にするかもしれないが、それに見合う大きな見返りを用意してくれているのである。

全体の流れを簡単に示しておこう。第1節では、〈支配的モナドー従属的モナド〉関係と、それらの概念が登場する以前から使用されていた〈精神ー有機的体〉関係との間の、共通点・相違点を示す。第2節では、支配的モナドに関して、ラッセルとアダムスの解釈を提示する。ラッセルは、支配関係を判明性の程度のみで還元しようとしたのに対して、アダムスはラッセルの解釈の不十分さを指摘して、その関係を〈支配的モナドー有機的体〉という二項図式として考える。第3節では、アダムスが提示する二項的な支配関係理解がライプニッツの見解と相容れないことを明らかにし、〈支配的モナドー従属的モナドー有機的体〉という三項図式で、支配関係を理解する必要があることを示す。

## 2. 〈精神ー身体〉関係と〈支配的モナドー従属的モナド〉関係

ライプニッツが「支配的モナド」という概念に最初に言及するのは1703年6月の「デ・フォルダー宛書簡」でのことである<sup>3</sup>。とはいえ、「支配的(dominans)」という語で他の名詞を形容する用法はそれ以前から見いだすことができる。例えば、1698年の『自然そのものについて』では「支配的魂、従って人間がそうであるような知性的魂は、どこにでもありうるわけではない」(GP IV 512)というように「魂(anima)」を形容する語として用いられている。

ところで、共通に「支配的」という形容を伴った魂とモナドとの間には、何ら

かの概念的な差異があるのだろうか。言い換えるならば、初期から一貫して使用され続けることになる〈精神（支配的魂）－身体〉関係と、1700年代によく登場する〈支配的モノダ－従属的モノダ〉関係との間には、いかなる共通点や相違点が存しているのだろうか。次のふたつの引用からは、両関係の共通性を読み取ることができる。まず、中期ライプニッツのテキストである「アルノー宛書簡」を確認する。

人間は或る真の一性を有しており、その一性は人間の魂によって与えられる。それにもかかわらず、その身体の塊は、器官や管、体液、精気へと分割されるのであり、その身体に固有のエンテレケイアを与えられた無数の物的実体で確かに充満してもいる。(1687/10/9, GP II 120. 傍点は引用者による)

ここでは、人間身体における各器官の統一が魂によって与えられていることが明確に示されている。基本的に中期のライプニッツは、様々な物的実体から構成された身体を統一するものとして、人間的な魂や精神、実体形相を捉えていた。このような構造は、1703年の「デ・フォルダー宛書簡」における支配的モノダに関しても見ることができる。

従って、私は次のように区別する。(1) 第一エンテレケイア、すなわち魂；(2) 質料、つまり第一質料、すなわち原始的な受動力；(3) この両者による完足的モノダ；(4) 物塊、すなわち第二質料、すなわち有機的的身体、これに無数の従属的モノダが協働する；(5) 動物ないし物的実体、[有機的]機械のうちの支配的モノダがこれを一なるものにする (quam Unam facit Monas dominans)。 (1703/6/20, GP II 252. 傍点は引用者による)

ここで言われるのも、統一の原理としての支配的モノダである。支配的魂も支配的モノダも、同じ機能を果たすものとして共通性を見いだすことができる。1703年の支配的モノダ登場時点においては、それは支配的魂のある種の言い換えのようなものとしても理解されうるのである<sup>4</sup>。

しかしながら、複合物体を「一なるものにする」モノダは、イエズス会士トゥルヌミーヌの批判を受けることとなる<sup>5</sup>。1703年5月と6月に雑誌 *Mémoires pour L'histoire des Sciences et des Beaux-arts* に掲載された記事 « Conjectures sur L'union de l'ame et du corps » において、このイエズス会士は次のように批判している。

というのも、結局、対応（correspondance）ないし調和（harmonie）といったものは、統一（union）でも本質的な連結でもないからである。人がふたつの時計の間に想定するような何らかの類似、またそれら関係の正確さが完全であるとき、一方の運動が他方の運動に完全な対称性をもって対応していても、この二つの時計が統一されているとはいえない。<sup>6</sup>

じっさい、後のライプニッツ自身の立場に従っても「外的原因はモナドのうちに流れ込むことはできない」（『モナドロロジー』§ 11, Robinet 75）のであるから、実体同士の間には調和以上の「一なるものにする」というような影響関係を認めることは難しい。

1703年の時点で、ライプニッツ自身は支配的モナドそのものに一性を与える働きを考えていたことは先に見た通りであるが、後にライプニッツは支配的モナドそのものと一性を切り離して考えるようになる。

さらに、支配的モナドを有している身体か、有機的なものとしてそれ自体で一となっている身体（*corpus quae habent monadem dominantem, seu quae sunt unum per se ut organica*）以外のところに〔実体的紐帯が〕置かれる必要はありません。そして、この紐帯は常に〔支配的〕モナドに帰属しているのです。（「デ・ボス宛書簡」1715/4/29, GP II 496）

「支配的モナドを有している」ことと、「それ自体で一となっている」こととは、常に両立しているとしても、前者が後者の原因であるとは言われないのである<sup>7</sup>。本論文では議論を絞るために実体的紐帯について詳しく論じることはしないが、支配的モナドが有していた一性付与の働きは、実体的紐帯へと持ち込まれ切り離されることとなる。このような変化は、ライプニッツが、支配的魂と連続的な意味で捉えられた支配的モナド概念から、そうではない新たな支配的モナド概念の使用へとシフトしたことを示唆している。すなわち、一性を付与することができる特権的な支配的モナドから、通常モナドと同列におかれた支配的モナドへの変化である。それゆえ、「或る馬における物体的実体の一性は、何かモナドの屈折（*refractio*）から生じることはなく、実体的紐帯を付け加えることからしか生じない」（「デ・ボス宛書簡」1712/6/16, GP II 451）と言われうるのである。

以上のような変遷は、言い換えるならば、ひとつの身体にひとつの魂や精神を

割り当てる伝統的な見方からの脱却としても捉えることができよう。〈支配的モナド-従属的モナド〉関係において、支配的モナドは、もはや絶対的に特権的なものではなく、互いを映し合う諸モナドの相対的な関係のうちに回収されることとなる。共時的にみれば、このことは、支配的モナドに従属する諸モナドの部分集合にも、固有の支配的モナドを認めうることを帰結する。見方を変えれば、ひとつの有機的身体が、他の様々な有機的身体から構成されていて、それぞれをまたひとつの生物とみなすことができるのである。また、通時的にみれば、支配的モナドが従属的モナドへと変化しうることを帰結する。これは、魂の不死性の主張を保持しながら、我々が通常経験する「死」という出来事を説明可能なものにする。例えば、判明な意識の断絶は、支配的モナドがその地位から失墜することであり、また捕食による死であれば、それまで支配的であったモナドが他の支配的モナドに従属するモナドとなることとして理解されうるだろう。

さて、以上のようにライプニッツが提示した支配的モナドにおいて、支配関係とはどのように理解すべきものなのであろうか。次節では、この点に関して、ラッセルの見解とそれに対するアダムスの批判を軸に検討してゆく。

## 2. 二項図式：〈支配的モナド-有機的身体〉

先にも述べたように、支配的モナドが他のモナドに従属させる場面について、それらの間に実質的な影響関係があるということとはできない。それゆえ、次のような仕方で支配関係は説明されることとなる。

私は、支配的モナドが他のモナドの实在から何かを取り去るのかわからない。モナドの間には交渉関係 (*commercium*) はなく、合致 (*consensus*) があるだけなのだから。[……] モナド相互の支配と従属は、モナドそのものにおいて考えるならば、表象 (*perceptio*<sup>8</sup>) の程度の違いでしかない。(「デ・ボス宛書簡」 1712/6/16, GP II 451)

支配的モナドと従属的モナドの間にあるのは、実質的な影響関係ではなく、ただ相対的な表象の程度の差だけである。つまり、或る特定のモナドがモナドの或る集合のうちで最も判明性の高い表象を有している場合に、そのモナドが支配的だと言われるのである。それゆえ、ラッセルは「他の諸モナドがとても混雑した仕方で表現することをより明晰に表現する、という意味で支配的モナドは支配する

のである<sup>9</sup>」と理解する。言い換えれば、ラッセルにとって支配関係とは判明性の程度に還元されるものなのである<sup>10</sup>。

しかしながら、判明性の程度に着目するこの規定だけでは支配的モナドを十分に規定できないことを、アダムスは指摘している。というのも、判明性に基づくのみでは、なぜ支配的モナドが限定された範囲の従属的モナドを有するのか説明することができないからである。『モナドロジー』で言われていることに従うならば、あらゆるモナドは他の全てのモナドを、十分に判明ではないとしても表象しており、判明性の程度は連続的である。それゆえ、私の身体は現に私が私の身体だと考える部分よりも拡張されているかもしれず、身体周囲の空気の層も、目の前の机も「私である」という可能性がでてきてしまう<sup>11</sup>。

さらに、支配関係が判明性のみに依拠するものだとすると、「私の魂が、土星の運動よりもリンパ管のリンパ液の運動についてより多くの思惟と認識をもつ」（「アルノーからライプニッツ宛書簡」1687/8/28, GP II 105）ことになるが、このことは、アルノー同様、われわれにとっても信じがたい。われわれは、自分自身の身体のうちで生じる出来事よりも、外的な出来事をより判明に認識することを日常的に経験している。もし、判明性の程度のみによって支配関係が決定されるのだとすれば、リンパ管は私の身体ではないが、土星は私の身体である、ということにもなってしまうのである。

アダムスが提示する支配的モナド解釈は、以上の問題を解決しうるものである。彼の解釈は、ラッセルが提示したモナド一元論的な理解に対して、「有機的体（*corps organique*）」を付け加えることで、従属的モナドの範囲を限定しようというものである。「全体の魂（*anima totius*）は、もし同時に全体の構造のために全体のうちで支配的魂（*anima dominans*）であるのでなければ、切り離されて生気づけられた部分の魂（*anima partis privatim animatae*）にすぎない」（「デ・フォルダー宛書簡」1699/9/1, GP II 194. 傍点は引用者による）というテキストにおいて、アダムスは「全体の構造」という部分に着目する。すなわち、全体の構造を有機的体的なものとして捉えるのである。そして、次のように主張する。

モナド的支配というライプニッツの概念の正しい理解は、支配的モナドの表象のより高い判明性に依拠するのと同様に、支配的モナドとその有機的体との構造との関係に依拠している。<sup>12</sup>

ラッセルが提示した支配関係の条件が、判明性の程度のみであったのに対して、

アダムスはそこに有機的・身体的な関係をつけ足す。つまり、〈支配的モナド—有機的・身体的〉の二項図式として支配関係を捉え返すのである。このような有機的・身体的な関係は、われわれの経験に先立って与えられうるものであるから、それに従って従属的モナドの範囲を限定することができる。アダムスの二項的な支配関係理解は、このように第一の範囲画定問題に回答を与えることができる。さらに、それは、先に示したふたつ目の問題、すなわち身体以外のものの判明性がより高い場合に関する問題にも回答を与えることができている。

ところで、私たちは、他の物体が私たちの身体に対してもっている関係によってそれらを認識する。それゆえに、魂は、私たちの身体に属しているものをよりよく表象するのであり、土星や木星の衛星を、私たち自身の目において生じる運動に従ってのみ知るのだ、ということは正しいのである。（「アルノー宛書簡」1687/10/9, GP II 113. 傍点は引用者による）

モナドの支配関係の説明に有機的・身体的な関係を付け加えることで、外的なものの判明性は、支配的モナドが結びつく有機的・身体的な運動へと還元される。つまり、外的なものの判明性の高さは、有機的・身体的な運動の判明性の高さへと移し替えられることとなるのである。以上のように、アダムスの二項図式的解釈は、支配関係の範囲画定の問題と外的なものに対する判明性の問題とに、それぞれ回答を与えることができる。

しかしながら、以下で詳しく検討してゆくように、アダムスによる解釈は、支配的モナドが有機的・身体的な関係に対して実質的な影響関係を有すると考える点で、ライプニッツの主張と相容れないものとなってしまっている。問題は、支配的モナドがどのように有機的・身体的な関係を持つかという点にある。アダムスは、支配的モナドが有機的・身体的な表象にとっての欲求として働くと考えた。つまり、支配的モナドは、能動的な仕方でも働くことで受動的な有機的・身体的な関係において結果することの理由として働くのである<sup>13</sup>。このような見解から次のような帰結が提示される。

そのあらゆる大きさの部分のうちに対多の働きを持つ或る有機的・身体的な関係は、機械的に説明されうるだけでなく、少なくとも植物的であり、もしかすると感覚的で理性的かもしれない魂の能動的な欲求に応じた指図どおりに目的論的にも説明されうるのである。<sup>14</sup>

アダムスがいうような〈支配的モナド－有機的体〉という二項図式において、支配的モナドは、〈精神－身体〉的な支配関係のうちで捉えられた精神と同じ身分に置かれている。身体を「一なるものにする」精神と、身体に生じることの理由となる精神とは、同等に特権的であるといえよう。しかし、第1節で確認したような支配的モナド概念の変遷を考慮にいれるならば、支配的モナドが外的な有機的体面に直接的に働きかける支配関係をとることはできない。次節では、この問題を敷衍しつつ、支配関係に関する代替案として〈支配的モナド－従属的モナド－有機的体〉という三項図式を提示する。

### 3. 三項図式：〈支配的モナド－従属的モナド－有機的体〉

以上のように、ラッセルは判明性の程度のみを支配関係の条件とし、アダムスはそこに有機的体面との関係を付け足した。モナドの支配関係に関して、二項図式を採る場合、支配的モナドは直接的に有機的体面に影響するものとして捉えられていた。対して、〈支配的モナド－従属的モナド－有機的体〉という三項図式では次のように考えることができる。①〈支配的モナド－従属的モナド〉間には、支配的モナドによる実質的な影響関係のない支配関係、すなわち判明性の程度による支配関係；②〈従属的モナド－有機的体〉間には、有機的体面による従属範囲の限定関係；③〈有機的体面－支配的モナド〉間には、支配的モナドが有機的体面を全体として表出するという関係。このことを以下で詳しく検討してゆく。

まず、支配的モナドや精神といったものが、能動的な欲求として、有機的体面に直接働きかけるということはない、という点について確認したい。ここでは、1709年と1711年との二度に分けて執筆された「シュタール医学論への反論」の一部を引用する。

魂が身体を表象するからといって、身体が魂の欲求を実行する (exsequor)、と私は主張しない (というのも、私の判断では、いかなる表象も物体には帰属しえないからである)。そうではなくてむしろ、身体は、心の欲求に付き従うように、すでにそのとき機械的法則によって動かされているからなのである<sup>15</sup>。(「シュタールの諸観察に関する再抗弁」Yale Leibniz-Stahl 334)

ライプニッツは、有機的体面が機械的にのみ働くということを強調し、魂ないしモナドといったものが、身体に対して欲求として働きかけることを認めない。欲



求はあくまで心理学的な働きかけにとどまるのであり、それは魂に存する表象に対する働きにすぎない。それゆえ、非物体的な魂や支配的モノダと有機的身体との間には、ただ恒常的な予定調和や表出の関係が成り立つだけで、一方が能動的欲求として他方を付き従わせるという影響関係を考えることはできないのである。

ルックによれば「アダムスは、有機的身体と支配的モノダの関係を、従属的モノダと支配的モノダの関係から明確に切り離すことをしなかった<sup>16)</sup>」。それゆえに、アダムスは〈精神—身体〉関係のうち支配的モノダを取り込み、支配的モノダと有機的身体の間に、表出関係だけでなく、支配関係までも置くことになったのである。これに対して、本論文が指摘したいのは、支配的モノダは有機的身体と従属的モノダとに対して、それぞれ異なる関係を有しているということである。すなわち、〈支配的モノダ—有機的身体〉の間には表出関係を、〈支配的モノダ—従属的モノダ〉の間には支配関係を置く。

支配的モノダと有機的身体との直接的な関係を断つことは、ラッセル的な理解、すなわち判明性の程度のみによって規定された支配関係に立ち戻ることでもある。しかし、それだけでは先に提示したような、従属的モノダの範囲画定問題に答えることができなくなってしまう。ライプニッツ自身の主張に反しない仕方で、その問題を解消するにはどうすべきだろうか。そのためには、有機的身体をアダムスとは別の仕方で前提すること、言い換えれば、支配関係を前提として有機的身体を考えるのではなく、逆に有機的身体を前提として支配関係を考えることが求められる。支配関係は、従属的モノダが外部から有機的身体によって限定されることで初めて可能になっている。以上のように、支配的モノダは判明性の程度によって従属的モノダに対して支配関係を構成し、かつそこに従属するモノダは前提された有機的身体によって範囲画定されているのである。じっさい、ライプニッツは、先にも引用した箇所、支配的モノダそれ自体が従属的モノダの範囲を決定するという仕方ではなく、むしろその場面で有機的身体を持ち出していた。

さらに、[実体的紐帯が] 支配的モノダを有している身体か、有機的なものとしてそれ自体で一となっている身体以外のところに置かれる必要はありません。(「デ・ボス宛書簡」1715/4/29, GP II 496)

さて、以上のように支配関係のうち従属の範囲を決定するために有機的身体が持ち出されるとすれば、そのような身体そのものはどのように決定されるのが問題となる。何がひとつの有機的身体なのかが明らかでなければ、結局、従属

の範囲は恣意的なものにならざるをえないからである。この点で、アダムスの見解をより発展させたルックは支配的モナドによる従属的モナドの取り纏めの働きを残すことになった<sup>17</sup>。アダムスは「欲求」という仕方での働きを提示したが、ルックはそれをより明確な仕方ですべてを記述し直し、「*a*が*b*において生ずることの理由を有する<sup>18</sup>」関係を支配的モナドが特定の他のモナドのグループについて持つ場合に、それら他のモナドたちをひとつの集団へと纏め上げるのだと考える。しかし、他のモナドのグループに生じることの理由をもつとしても、先にも見たように、支配的モナドに対して「一なるものにする」働きを認めるべきではない。

むしろ、有機的身体は、支配的モナドから独立に決定されるものだといえる。このような方針をとるならば、支配的モナドの欲求も理由としての働きも必要とせず、従属的なものの範囲を限定することができる。次のテキストは、ライプニッツ自身がそのように考えていたことを示している。

全ての器官は機械であり、全ての有機的機構(organismus)は機械的機構(mechanismus)に基礎を置いている、ないしは前提としているということが[シュタールの]『応答』によって示された。しかし、これでは不十分である。たとえそれがより精密でより神的なものであったとしても、有機的機構は形相的に機械的機構以外の何ものでもないということを付け加えなくてはならない。というのも、自然においては全てが機械的に生じてこなければならぬからである。[……] 諸物体[諸身体]の本性、つまりその大きさ・形・運動の法則から判明に説明できるところの物体[身体]において、全てが生じてこなければならぬのである。これがまさに人々が機械的と呼ぶところのものである。(「シュタールの諸観察に関する再抗弁」Yale Leibniz-Stahl 254)

ここでライプニッツは、有機的身体が機械的である以上のものを何も含まないことを明確に主張している。大きさ・形・運動の法則という機械論的な方法によって、われわれは有機的身体についてのすべてを知ることができる<sup>19</sup>。すなわち、それが有機的身体としてひとつの纏まりを構成していることも含めて知ることができる。それゆえ、そこに支配的モナドが前提される必要はなく、むしろ支配関係の前提として有機的身体が置かれることが可能なのである。

こうして、われわれは〈支配的モナド—従属的モナド—有機的身体〉という三項図式によってライプニッツが主張しようとした支配関係の構図を捉え返すことができる。つまり、支配関係そのものは、判明性の程度のみによって説明され、

従属的モナドの範囲画定は、先立って認識された有機的身体の限定によって可能になっている。このことは、言い換えるならば、アダムスが欲求の働きによって直接的に結び付けようとした支配的モナドと有機的身体とを一度切り離し、従属的モナドを以て再び両者を接合することに他ならない。そして更には、ライプニッツの考える支配関係というものが、モナド一元論的な理解に収まりきらないことを示唆しているのである。

#### 4. おわりに

本論文では、支配的モナドと従属的モナドの間の支配関係を、有機的身体の関係でいかに理解するべきかを検討してきた。判明性の程度のみで依拠するラッセルの理解は、従属的モナドの範囲画定に関して問題があった。アダムスは有機的身体を持ち出し、〈支配的モナドー有機的身体〉の二項図式として支配関係を捉えることで、範囲画定問題を乗り越えた。しかし、同時に支配的モナドが欲求として有機的身体に働きかけるという構図を描くことになってしまった。見てきたように、ライプニッツ自身は、支配的モナドと有機的身体の間にいかなる影響関係も支配関係も認めていない。それゆえ支配関係そのものは判明性の程度の相対的な関係に過ぎない。それでも、支配的モナド概念が存続することができるのは、有機的身体を前提とするからなのである。こうして、支配関係を可能にする構図は〈支配的モナドー従属的モナドー有機的身体〉という三項的なものとなる。

このような三項図式において、支配的モナドそのものはいかなる経験的な因果性とも縁を持たない理念的な位置を保ち、経験的な有機的体から切り離される。両者を結びつけるのは、形而上学的支配関係と経験的な有機的体とによって同時に規定された従属的モナドということになる。つまり、支配的モナドはその主従関係を通して経験へと接続されているのである。

以上のことを最初に述べた实在論的解釈との絡みで述べるならば、支配関係という形而上学的な関係が、経験にとって完全に優位なものとして置かれるのではなく、むしろ経験的な事柄が、モナド間の関係のうちに密かに影響を与えていることを示唆している。ここでこそ、三宅の問題提起を想起するべきであろう。

「関係」を単に知覚者の精神のうちに存する観念とし、合成物をただ現象とのみみることが、生物体の存在論的構造に適合するかどうか。ライプニッツが予定調和による現象の一致ということの外に、何か実体的統一を思わせる

支配的モナドの如き概念を導入し来った理由は如何。このように反省してみると、一見単に可能なる想定として提出された実体的紐帯とか実在的連続とかの概念のうちに、事象そのものの要求による、形而上学的「アトミズム」の緩和、ないし実在的連続観への譲歩の意味を認めることができはしないか。このような問いを私はライプニッツ哲学に対して、またその研究者に対して提出したいのである。<sup>20</sup>

支配関係において前提的に導入される有機的体による限定の要求こそ、ここで三宅がいうような「事象そのものの要求」だと言えよう。ここに、形而上学に収まらずわれわれの経験への参照を要請する实在論的解釈のひとつの可能性が存するのである。

<sup>1</sup> 例えばレッシュャーは次のような観念論的解釈を提示している。「複合物や寄せ集めは建前的にのみ実体であり、[実際は] その表象を通して諸実体を一緒に結びつけている実体(エンテレケイア)の支配によって統合され調整された全て切り離された単位の集合にすぎない」[Rescher (1991), p. 46]。

<sup>2</sup> Cf. Arthur (2018), pp. 62–63.

<sup>3</sup> Cf. Look (2002), p. 380. また、語の使用と議論の進め方に関して次のことに注意しておくべきだろう。支配的モナドと従属的モナドの支配関係を問うことは、「支配 (dominatio)」概念が何を意味するのかを問うことでもある。ところが、ライプニッツ自身は支配それ自体に関して何か説明をすることはしていない。ローランが指摘するように「支配の概念は、名詞としてというよりも、形容詞として登場する」[Roland (2012), p. 291] のである。それゆえ、われわれは、ライプニッツが「支配的モナド」や「従属的モナド」について語った内容から、両者の間の関係を引き出してくる必要がある。

<sup>4</sup> 器官の寄せ集めにすぎない有機的体に一性を与えることは、重要な意義を有している。本稿の「はじめに」で既に引用したように、少なくとも中期のライプニッツにとって(一であるもの)は(存在するもの)と同値の関係にあると理解されていた。それゆえ、支配的魂と支配的モナドの働きとは、それ自体では単に寄せ集めでしかないような器官の集まりに対して、一性を与えるとともに真の存在を与えることなのである。

<sup>5</sup> この批判が後にライプニッツが提示する「実体的紐帯 (vinculum substantiale)」概念に強い影響を与えたことは、すでにボームによって指摘されている [cf. Boehm (1938), pp. 84–89]。また、最近ではルックがこの点についてより詳しく論じている [cf. Look (1999), pp. 51–56]。

<sup>6</sup> de Tournemine ([1703] 1968), pp. 869–870.

<sup>7</sup> ベラヴァルは支配的モナドを論じるにあたり、先にみた1703年6月20日の「デ・フォルダー宛書簡」における「Unam facit」という語とともに、1714年の『理性に基づく自然と恩寵の原理』(以下『原理』)第3節における次の一文を引用している [cf. Belaval (2005), p. 242]。「[判明なモナドは] (例えば動物のような) 複合実体の中心をなし、その一性の原理となっている」(Robinet 31)。ベラヴァルは『原理』の「判明なモナド」を「支配的モナドないしは支配者」[Belaval (2005), p. 242] として解釈し、両テキストとも支配的モナドに関わるものとしながら、「デ・フォルダー宛書簡」での支配的モナドの働きを『原理』におけるそれと同一視して議論を進める。そのさい、両テキストにおける支配的モナドは「理念的原理」として解釈される。「もしこのモ

ナドが或る有機的身体を「表出する (exprimer)」としても「実現する (realiser)」するのではない。モノドは一性の原理ではあるのだが「理想的 (ideal)」原理であり、同時的ではあるが他の諸モノドと交流をもたないのである」[Belaval (2005), pp. 244-245]。ベラヴァルがこの直前でクロード・ベルナルに從って支配的モノドを「指導理念 (idée directrice)」と言い換えていることから明らかなように、「理想的原理」とは超越論的な原理であり、作用原因からは切り離して考えなければならない。本稿は、晩年の『原理』における支配的モノドを「理想的原理」として解釈することには同意するが、本論で述べてきたことに従うならば、1703年の「デ・フォルダー宛書簡」においてその解釈を適用することはできない。複合実体を「一なるものにする」支配的モノドは、一性を「実現する」のであり、すなわちその原因となっているのである。

<sup>8</sup> ゲルハルト版では「完全性 (perfectio)」であるが、デュタン版やイェール版に從って「表象 (perceptio)」とする。「魂は、それが有する判明な諸表象に応じて、完全性をもつ」(『原理』§ 13, Robinet 55) とあるので、判明性の度合いは完全性の度合いと比例的な関係にあるといえよう。

<sup>9</sup> Russell (1975), p. 148.

<sup>10</sup> 判明性の程度ということでは、その最大のものとして神が想定される。「神のみがすべてのものについて或る判明な認識を有している。それは神がすべての源だからである。神はどこもかしこも中心のようであるが円周はどこにもない、というのはうまい言い方である。すべてのものは直接神に現前し、この中心からいかなる距離もない」(『原理』§ 13, Robinet 55)。「どこもかしこも中心」である神に対して、モノドはひとつの中心にすぎない。『原理』において、ライプニッツは支配的モノドに代わって「中心的モノド (monade centrale)」という語を使用しながら、「中心的モノドは、[……]一種の中心におけるように外的なものを表現する」(『原理』§ 3, Robinet 31) と述べている。神との対比で被造的モノドの支配を考えるのであれば、その中心の最も近くで取り巻く諸モノドとの間に直接的な支配関係が成り立っているといえることができるだろう。このような理解のもとラッセルは「支配的モノドは他のすべてのモノドの直接的な近傍である」[Russell (1975), p. 148] とし、支配的モノドを判明性の度合いが最も大きいものとして考える。

<sup>11</sup> Cf. Adams (1994), p. 286.

<sup>12</sup> Adams (1994), p. 286.

<sup>13</sup> Adams (1994), pp. 289-291.

<sup>14</sup> Adams (1994), p. 291.

<sup>15</sup> ライプニッツはここで「魂 (anima)」という語を使用しているが、これはモノドとも言い換えられる。「それ [魂] は、私がいつもモノドという名で呼んできたものである。さらに、そのような実体と物的な質料との間にはいかなる比例 (proportio) もないので、その実体と質料の運動との間にいかなる結合も考えることはできない」(「シュタールの諸観察に関する再抗弁」Yale Leibniz-Stahl 322)。ここでの「いかなる比例もない」とは、例えば「凸面鏡に映し出される壮大な宮殿の小さい表現からは、魂のうちに場所を持たない他のものが与えられない限り、その宮殿の大きさを決定できない」(同書 328) ようなものである。

<sup>16</sup> Look (2002), p. 383. ルックもまたアダムスの見解を発展させ「支配的モノド-従属的モノド-有機的身体」による三項図式をとっている。しかし、後にみるように、アダムスが提示した欲求による従属的モノドへの支配関係を、より明確に規定し直しつつ引き継いでおり、支配的モノドと魂の働きを同一視する点で本論文が提示する三項図式の内実とは異なるものとなっている。「ライプニッツは、実体形相を魂と、そして支配的モノドも魂と呼ぶのであり、それゆえ支配的モノドは有機体全体の形相なのである。支配的モノドと実体形相とがライプニッツのいうところの有機体において同じ機能を果たすことは疑いえない。すなわち、共に有機体の一性と能動性を説明するのである」[Look (1999), p. 38]。本論文の立場では、後にみるように、支配的モノドをそれまでの魂概念と同じ一性付与の機能を果たすものとしては考えていない。

<sup>17</sup> 無数の従属的モノドをいかにひとつに纏め上げるかということについて、ルックは次のように述べている。「この問題に対する回答は、他のモノドやモノドのグループに生じることの理由

を含んだあるひとつのモノダの観念のうちに見出されることだと、私は考える。例えば、ある動物が自然のひとつの機械であるのは、全体的構成の諸機能がひとつの中心的モノダによって引き起こされるからなのである。この中心的モノダはそのうちに複合的実体のうちに生じることの理由を含み込んでいる。そして、ある意味では、中心的あるいは支配的モノダがその従属しているものうちに生じるすべてのことの理由を含み込んでいるという、まさにその事実が、全く、モノダがその従属しているものを自然のひとつの機械へと「統一する」という主張に存している」[Look (2002), p. 393]。ただし、これだけでは統一された従属的モノダのグループを十分に説明することはできないことをルックは認めている。すなわち、従属的モノダの範囲を確定することができないのである。そのさいの解決は、本論文と同様に身体による限定を持ち込むことである。

<sup>18</sup> Look (2002), p. 397.

<sup>19</sup> この点に関しては、三浦 (2018) で提示した「理念的機械論」を具体的な方法論として考えている。「理念的機械論においてこそ、有機的身体はそれ固有の無限性・特殊性のもとで捉えられるのである」(同書, p. 111)。

<sup>20</sup> 三宅 (1973), p. 281.

#### 凡例

ライプニッツの著作からの引用には以下を用いた。丸括弧内は略号。

Leibniz, G. W., *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Weidman, 1875–1890 (Nachdr., Olms, 1978). (GP)

— *Principes de la nature et de la grâce fondés en raison – Principes de la philosophie, ou Monadologie*, éd. A. Robinet, Presses Universitaires de France, 1954. (Robinet)

— *The Leibniz–Des Bosses Correspondence*, ed. and transl. B. C. Look and D. Rutherford, Yale University Press, 2007.

— *The Leibniz–De Volder Correspondence*, ed. and transl. P. Lodge, Yale University Press, 2013.

— *The Leibniz–Stahl Controversy*, ed. and transl. F. Duchesneau and J. E. H. Smith, Yale University Press, 2016. (Yale Leibniz–Stahl)

#### 文献表

Adams, R. M., *Leibniz: Determinist, Theist, Idealist*, Oxford University Press, 1994.

Arthur, R. T. W., *Monads, Composition, and Force: Ariadnean Threads through Leibniz's Labyrinth*, Oxford University Press, 2018.

Belaval, Y., *Leibniz: Initiation à sa philosophie*, Vrin, 6<sup>e</sup> éd. 2005 (1<sup>er</sup> éd 1952, *Pour connaître la pensée de Leibniz*, Éditions Bordas; 2<sup>e</sup> éd 1962, *Leibniz: Initiation à sa philosophie*, Vrin). (引用中の頁数は第6版の余白に示された第2版の頁数を指示している)

de Tournemine, R.-J., « Conjectures sur L'union de l'ame et du corps » *Mémoires pour L'histoire des Sciences et des Beaux-art*, 3, 1703 (reprint 1968), pp. 864–875.

Look, B., *Leibniz and the 'Vinculum Substantiale'*, Franz Steiner, 1999.

— « On monadic domination in Leibniz's metaphysics », *British Journal for the History of Philosophy*, 10, 2002.

Rescher, N., *G. W. Leibniz's Monadology An Edition for Students*, University of Pittsburgh Press, 1991.

Roland, J., *Leibniz et L'individualité Organique*, Les Presses de l'Université de Montréal Vrin, 2012.

Russell, B., *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, George Allen and Unwin Ltd., 1975 (1st ed., 1900; 2nd ed. 1937).

Smith, J. E. H., *Divine Machines*, Princeton University Press, 2011

三浦隼暉「後期ライプニッツの有機体論 —機械論との連続性および不連続性の観点から—」『ライプニッツ研究』5, 2018, pp. 100–118.

三宅剛一『学の形成と自然的世界』みすず書房, 1973.